

在留ペルー人から見る祭り「奇跡の主」の意義と将来の展望

—第2世代における宗教継承の課題を中心に—

オチャンテ 村井 ロサ メルセデス

Ochante Muray Rosa Mercedes

キーワード：カトリック教会、奇跡の主、第2世代の信仰継承、在留ペルー人

要旨：

本稿では、これまでに調査されていない地域の「奇跡の主」(イエスキリストを指す)の祭りを対象に、デカセギ現象が始まった90年代から30年経過した現在の祭りの形態、長年関わっているリーダーから見た祭りを継続する意義、そして祭りの今後の展望についてまとめている。また90年代に来日した第1世代のペルー人の高齢化に伴い、第2世代への信仰継承ができていないかに焦点を当てた。調査対象者の話から、ペルー人の若者の参加者が少なく、第2世代への信仰継承が課題であることが明らかとなった。今後も外国人が増加する中、司祭の高齢化に際する外国人リーダーの養成や、外国人信者に教会の扉を開け、日本人の教会から普遍的な教会への意識の変化が重要であることが考えられる。

I. はじめに

「ペルー人がいるところに『奇跡の主 (Señor de los Milagros)』がある」(Donde hay un peruano, ahí está el Señor de los Milagros)という表現がある。一つの表現であるが、確かにペルー人のコミュニティがあるところでは必ずと言っていいほど「奇跡の主」を祝うミサ、聖行列とフェスタが行われている。日本もその例外ではない。

1990年の出入国管理及び難民認定法の改正から30年が経過し、日本に在留しているペルー人は2020年6月末現在で48,613人となっている¹。その中で永住の資格を獲得している者は33,495人に及ぶ。一時のデカセギ労働者から高い確率で日本に永住すると決めている者が多いと言えるだろう。

在留ペルー人のほとんどは日系または日系の配偶者として「定住者」ビザで来日し、

その後永住の資格を獲得している。アジアからの技能実習生や 2019 年に外国人労働者受け入れ拡大のため新たに設けられた特定技能で来日する者とは大きく異なり、日系南米人には就労の制限はなく、家族の帯同も認められる。そのため、多くの場合は家族を呼び寄せたりして、現在では第 3 世代で暮らす家庭も少なくない。

ペルー人は日本社会においてマイノリティの中のマイノリティである。同じ南米のブラジル人の 211,178 人と比べると在留人数が少なく、東南アジアの在留外国人の増加に伴い、在留外国人の国籍順位が落ちてきており、今は第 11 位となっている²。在留外国人の中でもマイノリティであるため、ペルー人のコミュニティを対象にした研究はブラジル人を対象にした研究に比べると少ない。

日本における数少ないペルー人の祭りとして、「奇跡の主」の祭りが挙げられる。日本において奇跡の主の祭りが最初に開かれたのは 1991 年と言われている。神戸の「カトリック住吉教会の奇跡の主」と 2009 年から開催されるようになった「カトリック枚方教会の奇跡の主」の事例を比較して故郷の祭りの再現を通してペルー人がエスニシティを顕在化する機会の意義を挙げている三木氏・沼尻氏両者による研究³や、2001 年から名古屋市「カトリック緑ヶ丘教会」で実施されるようになった奇跡の主の事例と日本人信徒の思いをまとめた寺澤氏の研究⁴、また、古屋氏による滋賀県の「カトリック草津教会」の事例を扱っている研究など⁵、奇跡の主の祭りについての研究は少なからずなされている。

本稿では、これまでに調査されていない地域の奇跡の主の祭りを対象にして、デカセギ現象が始まった 90 年から 30 年経過した現在の祭りの形態、長年関わっているリーダーから見た祭りを継続する意義、そして祭りの今後の展望についてまとめている。過去・現在を振り返り、将来を見据え問題をどのように克服できたか、また 90 年代に来日した第 1 世代ペルー人の高齢化に伴う第 2 世代への信仰継承ができていないかに焦点を当てる。

カトリック教会は多国籍信者からなることから、今後フィリピンやベトナム信者の数は益々増加すると予測される。そのような状況のもと、約 30 年前から来日し教会の一員となっているリーダーから学ぶことが多くあるのではないかと考えられる。カトリック教会の日本人信徒とペルー共同体の架け橋という役割を果たしている当事者の声に焦点を当てながら、「奇跡の主」の祭りを通してのコミュニティ形成への諸問題について調べることによって、課題の克服となるヒントが得られると考える。

II. 「奇跡の主」の起源

奇跡の主への信心はとても古く、起源は 17 世紀頃まで遡る。スペインによる植民地統治時代の 1651 年、アンゴラ出身の黒人奴隷がペルーの首都リマのパチャカミージャ地区の壁に主キリストの磔刑像を描いた。その磔刑像の前に多くの黒人奴隷が集まり、礼拝を始めた。

1655 年 11 月にリマは大地震に襲われ市内の建物の大半が倒壊したが、この絵が描かれた日干しレンガの壁は奇跡的に崩れることがなく信仰を集め続けたが、時が経つと忘れ去られていった。

1670 年、長く悪性腫瘍の痛み悩まされていたサンセバスティアン教会所属のアントニオ・レオンは、この主キリストの描かれた壁の周りの埃を払い、花やろうそくで飾り付け、屋根をつけて祈りを捧げた。すると奇跡的に腫瘍は少しずつ消え始め、やがて完治したと言われている。

それ以来多くの信者がお祈りに来るようになった。それを恐れた権力者たちはその動きを止めようとして、当時の統治者であるスペインの副王に訴えてその絵を消すように命令を出させた。しかし絵を塗り潰そうとする人は手が麻痺したり体が震えたりするなどの不思議な現象に襲われ、絵を消すことができなかった。

その知らせを聞いた副王は驚き、命令を撤回するだけではなくそこに小聖堂を建て、手厚く保護することを命じた。(現在この地はラス・ナサレーナス教会となっている。)

1687 年 10 月にも大地震が起きたが、この壁は無傷のままだった。数多くの奇跡によりこの絵は奇跡のシンボルとされ、「セニョール・デ・ロス・ミラグロス (奇跡の主)」と呼ばれるようになり、毎年 10 月になると奇跡を讃える聖行列が、油絵で模写されたキリスト磔刑図を掲げる現在のようスタイルで行われるようになった。

1746 年の大地震の際やその他の数々の奇跡の噂が広まり、「奇跡の主」の聖行列は年々数多くの



(写真:「奇跡の主のミサ」の様子: 鈴鹿教会より提供)

信者が集まるようになる。

1955年、「ナサレーナス奇跡の主信徒会」(Hermandad del Señor de los Milagros de Nazarenas)が大司教から公式に認められ、現在行列で歌われている「奇跡の主への讚美歌」が選ばれた⁶。

ラス・ナサレーナス教会の改修工事が終わり厳かな儀式が開かれるなど、この時から奇跡の主への礼拝には信仰を強める場だけでなく、アイデンティティを見つめ直す貴重な場として機能するようになった⁷。

また2005年に「奇跡の主」はバチカンから「ペルー在住者および移住者の守護者」と認定された⁸。そして2010年にはペルー共和国の議会で「ペルーの守護者」として法則に定められた。

現在では世界で最大のカトリック行列となっている。そして、今でも多くの信者がこのキリストの御絵の前で願ったり、起こった奇跡に感謝したりしている。

現在、ペルー以外に、南米、中米、北米、ヨーロッパ、オセアニア、アフリカ、そしてアジアでも開催されるようになってきている。日本では兵庫、大阪、滋賀、三重、愛知、静岡、神奈川、栃木、群馬、そして2016年から四国の香川県でも奇跡の主へのミサや祭りが開かれている。

Ⅲ. 方法

1. 調査概要：三重県（伊賀市、鈴鹿市）、静岡県（浜松市）、愛知県（小牧市・安城市・刈谷市）に在住し、教会活動に従事している調査対象者に、2020年10月から2020年12月にかけてインタビュー調査を行った。インタビューのほとんどはオンラインで実施したが、一部は調査対象者の自宅で行った。

インタビューの目的、質問内容及び守秘義務についての説明を行い、許可を得た上でインタビューを録音した。スペイン語で行ったインタビューはプロトコルを筆者が翻訳して日本語で記している。

2. 調査対象者：移民第1世代のペルー人で、所属している教会の役員、またはペルー共同体のまとめ役、リーダー役となっている人。1人はペルー国籍のカトリック司祭である。内訳は女性3人、男性3人の計6人である。ペルー人司祭以外の5人は日系であ

り、在留資格の「定住者」から早い段階で「永住」に切り替えている。また 1 人は 10 歳で来日し、日本の学校に通った経験があり、現在日本国籍を取得している。

表 1 調査対象者

	国籍	性別	来日年齢	来日年	活動地域	年齢	在留資格
A	ペルー	男	25歳	90年	浜松	54歳	永住資格
B	ペルー/日本	男	10歳	90年	小牧	41歳	日本国籍を取得
C	ペルー	女	29歳	98年	安城・刈谷	52歳	永住資格
D	ペルー	女	28歳	91年	鈴鹿	58歳	永住資格
E	ペルー	男	36歳	94年	京都教区司祭	62歳	宗教ビザ
F	ペルー	女	38歳	91年	伊賀	67歳	永住資格

3. インタビュー項目

本研究は 5 つの教会で活動しているペルー人リーダー当事者の視点に重点を置いており、対象者の「奇跡の主」の開催にあたっての体験、これまでの活動を振り返るため大きく 3 つの項目に分けた。

1) 日本で奇跡の主を祝う・開催する意義について、リーダー自身にとっての意味、コミュニティ形成にとっての意義についての質問をした。また、コミュニティでどのように開催するようになったのか。直面した問題をどのようにして克服できたか。

2) デカセギ現象から 30 年が経過した現在の祭りの形態とこれまでの変化、日本人信徒や主任司祭の理解と参加度、またペルー人の教会への参加度に関する質問を行った。

3) 第 2 世代のペルー人の参加、また 2020 年以降の奇跡の主の今後の展望に関する項目など、半構造化面接を行った。

インタビューからの引用箇所は「」内に表記し、筆者の質問の部分は斜体で、省略している内容は「…」で表記している。

4. 実施状況

調査は 1 回約 2 時間で行った。補足の質問等のやり取りは、電話やメールで行った。調査対象者のうち 4 人は日本語が堪能であったが、スペイン語の方が話しやすいため、ほとんどの調査はスペイン語で実施した。

IV. 結果と考察

1. 日本で奇跡の主を祝う・開催する意義について

対象者のほとんどがペルー人としてのシンボル、伝統・文化継承としての「奇跡の主」を挙げる。また、コミュニティやペルー人自身のための祭り、アイデンティティを見つめ直すための貴重な場としての意義を挙げている。

「信仰でありながら、文化でもある。ペルーにいた小さい時のことを思い出す。母と一緒に奇跡の主の行列に毎年参加していたからです。10歳までしかいなかったが、ペルーにいたときの楽しい思い出が再び体験できる」(Bさん)

「10月にペルー人たちが大勢集まり、ペルーのほんの少しを日本に持ってきたという感じがある。1年に一回であるが、在留ペルー人の信仰を振り返るきっかけとなる」(Cさん)

また、守護者である奇跡の主を祝うことの大切さを挙げながら、故郷の家族と離れ、孤独を感じるペルー人との交流、伝統的な踊りや食べ物を共に味わえる貴重な体験として挙げている。

「祭りで一緒になる、交流するのは重要である。その日、他の県からも大勢の参加者がある。日本生まれの子どもたちはマリネラを踊り⁹、その踊りを主に捧げるのを見ると喜びに溢れる。ペルーの伝統的な料理も出され、それも味わいに来る人もいる。」(Bさん)

カトリックの祭りでありながら、奇跡の主とペルーという国が深く結びついているようである。調査対象者のペルー人司祭によると、カトリック教会では普遍的などこの地域でも祝うような祭り、例えば「ファティマの聖母」、「ルルドの聖母」など、どこの国においても、たとえそこにポルトガル人、またはフランス人が一人もいなくても信心のある信者が集まって祝う。しかし、ある国の文化、アイデンティティと深く結びついている祭りもある。例としてはペルーの「奇跡の主」の祭り、他にはブラジルの「アパレシダの聖母」の祭りが挙げられる。多くの場合、ペルー人、ブラジル人がいないと開催されない。

また、この信仰を日本人にも伝えるためにあること、ペルーで生きてきた体験を日本にいる信者に伝えることに使命感を感じている調査対象者もいた。

「キリスト教ではない国で時には孤立し空虚さを感じることもあるが、身近に主を感じることを通して、イエス様を知らない他の人々とも信仰を分かち合えることができると

思います。」(Fさん)

「私たちは「奇跡の主」について多くの人に伝える使命感がある。「奇跡の主」はペルー人だけのものという考えを持つ人もいるけれど、そもそもこれはアフリカのアンゴラ出身の人が描いた絵でしょう。歴史は私たちに大事なことを教えてくれます。アドベ製の壁は非常に弱く、ちょっとしたアクシデントで倒れますが、奇跡の主が描かれているアドベ製の壁には抵抗力があり、あなたがどんな問題を抱えていても、倒れないし、何も傷つけません。二つの地震、津波があっても絵は無傷のままでした。この思いを日常生活で持っていれば、私たちも強くなるはずです。」(Aさん)

故郷から遠い日本で空虚さ、寂しさを感じても、奇跡の主の強さを感じる。大きな問題に直面しても、奇跡の主と一緒にいれば問題を乗り越えられる自信も生み出されるのではないだろうか。

2.30年経過した現在での祭りの形態とこれまでの変化と諸問題

すべての対象者地域は所属している教会と直接繋がっており、役員や主任司祭との円満な関係が保たれている。しかし、「奇跡の主」の祭りは、完全にペルー人の主催、ペルー人しか参加しない行事から教会全体の年間行事として変わってきている様子が伺える。

調査した6つの教会を3つのグループに分けると、まず一つ目として、教会の行事であり、日本語とスペイン語、または国際ミサの形式で「奇跡の主」が開催される教会として鈴鹿教会、浜松教会が挙げられる。三重県の鈴鹿教会では、日曜日の主日のミサは日本語であるが、「奇跡の主」のミサでは信者が全員参加するために、日本語とスペイン語の両方の言語を使用する。またミサ後、教会の駐車場でミニバザー、ペルー料理の販売など、教会全体の祭りとして開催されている。浜松教会ではミサは国際的なミサとして様々な言語の讃美歌などが歌われ、奇跡の主の聖行列を「奇跡の主の信徒会」だけが担ぐのではなく、教会の日本人、ブラジル人やフィリピン人なども紫色（キリストのご受難を表す色）の修道服を着て聖行列を担ぐ¹⁰。

二つ目のグループとして、教会の行事ではあるが、大半がスペイン語で行われるミサの時間内で開催される伊賀の上野教会と安城教会が挙げられる。上野教会ではスペイン語のミサであるが、ブラジル人の信者やフィリピン人、日本人の参加者も数人いる。土曜日の夜ミサの前に聖行列が行われ、「奇跡の主信徒会」がなく、ペルー人共同体が購入

した紫色の修道服をペルー人やその他の国の信者に貸し出している。またミサ後には持ち寄りパーティーをして参加者にペルー料理を提供する。安城教会の奇跡の主のミサに刈谷教会の信者も関わり、スペイン語のミサの時間内で行われ、主にペルー人の参加者が見られる。日曜日の午後1時からミサの前に教会内の駐車場で聖行列が行われ、小牧、豊田など関係のある「奇跡の主信徒会」からお花の寄付があり、教会の信者が持ってきたペルー料理の販売が行われるが、午後4時には次の言語のミサがあるため、祭りには長い時間をかけられない。

最後のグループとして「奇跡の主信徒会」が主に関わり開催している小牧教会が挙げられる。ここでは「奇跡の主信徒会」が活発に動き、月一回、あるいは必要に応じて毎週集まるか、ときにはオンラインでやり取りをしている。信徒会のリーダーが教会役員のメンバーでもあり、主任司祭や他の日本人の役員とも関わっている。10歳から来日している調査対象者は日本語も堪能であるため、ペルー人コミュニティと日本人共同体のパイプ役を果たしている。所属している教会にはイベントや寄付で集まったお金を毎年献金し、また困っている外国人への物資支援、クリスマスには養護施設への乳児や子ども用品の寄付、また安城教会が行っているホームレス支援にも関わっている。教会の近くにある公園でミサ、聖行列とペルー料理の屋台、祭りではペルーの伝統的な踊りが奇跡の主の捧げられるなど、一日をかけて祭りが開催される。また信徒会として、他所での奇跡の主のお祝いに協力に行くこともあり、10月内の日曜日は他の市町や県へ応援にも行っている。

このように教会の年間行事として教会の全員が参加できるような曜日・時間内にインターナショナルミサの形式で開催されるもの、10月の月一回開催されるスペイン語のミサ内でペルー人共同体が準備するもの、教会の許可と理解のもとで「奇跡の主信徒会」が主催となり、主にペルー人が集まるものがあると言える。

インターナショナルな形式でどのコミュニティの人も参加できるように工夫されていて、奇跡の主をペルー人だけではなく他の国のメンバーと一緒に開催できる喜び、達成感があると考える一方で、以前のように会場を借りて盛大に聖行列、パーティーをペルー人主催で、ペルー人のやり方で行いたいという信徒の声があるとインタビューから分かった。しかし、リーダーの中には、将来的に信徒の高齢化が進むことを考えると、ペルー人の信者のみではなく、共同体全員で関わり、教会の行事としてやり続けることに意義があると述べた。また天候に左右されなくて済むこと、フェスタより奇跡の主へ

の霊的な意味に主点を当てることのできる等の理由も挙げた。

これまでの問題点、また乗り越えてきた問題として、日本語が分からない、また住んでいる地域の規則が分からない、日本のカトリック教会の組織としての文化・規則などを理解できていないことから生じる諸問題について、次に挙げられるものがある。

「地域の慣習や規則を理解できていなかったから起きた問題があります。例えば、大きな音が近所迷惑になり、地元の警察が介入することがあった。また、駐車場不足で生じる問題は今でもあります。アルコール飲料の消費や、無断駐車者がないようにリーダーたちの強力な管理が必要でした。」(Eさん)

「ダメなこと、例えば駐車場のこと、時々、スペイン語圏の人は時にはずうずうしいところがあり、空いている所に止めることもあり、それで教会に迷惑をかけたこともある、またきれいな状態にあるのなら、返す時もきれいなままにして返さないといけないですね。そのような問題があります。今ベトナムの信者が増えているが、同じような問題も起こっていると聞きます。」(Bさん)

また言葉の問題より意思疎通ができなく、何故日本で奇跡の主を祝うのか、ペルー人にとって奇跡の主を祝う意義を日本人信徒が理解できないなどのことから生じる問題が挙げられる。

「奇跡の主の意味が分からなく、日本人は「ミラグロス」という祭りを知っていたけれど、意味でさえ理解できていなかった。私に関わるようになってから、役員の日本人と接する機会が増え、仲良くなって、日本語とスペイン語も話せるので、通訳をするようになりました。…幸い日本語が出来るペルー人信徒も増えてきているし、スペイン語のできる日本人もいるため交流が深まってきている。」(Bさん)

このように、駐車場や教会を利用するにあたっての注意点もコミュニケーション不足で生じる問題ではないかと考えられる。上記の体験のように、両方の言語ができるリーダー、両方の文化を知っているパイプ役の信徒が大きな役割を果たしているのが分かる。

3. 日本人信徒や主任司祭の理解と参加度、ペルー人コミュニティの参加度

日本人信徒や主任司祭の理解を得ていると答えるケースがほとんどである。しかし日本人の参加について聞くと、「珍しい物としての関心があるから」、「興味を示すから」、「サポートをしたいから」と答えている。しかし、ペルー人にとってどのような意味があるのか理解するのは難しいのではないかと答えた者がほとんどである。

日本語が堪能な B さんは日本人に対して奇跡の主の歴史や奇跡の主への愛について説明した時のことを次のように語っているという。

「ペルー人の守護者、リマ市を守った主だと歴史を説明します。それでみんな関心を持ってくれます。すごい昔から、歴史のある祭りだとか、神輿のようだとされます。奇跡の主信徒会には所属していないが、聖行列を担ぐ日本人もいるし、イベントの協力もよくしてくれます。」

ペルー人司祭の E さんは、日本人信者の協力と一緒に関わろうという姿勢も評価しているが、同時に同じ強さで信心する難しさも挙げている。

「地元の日本人共同体は再現する必要性は理解していますが、私たちと同じ強さでそれを体験していないと思います。前にも言ったように、このような祭りはある民のアイデンティティやその国の宗教的な習慣に強くつながっています。ですから、オブザーバーとしての責任を負わずに参加することが多いと思います。」

また調査対象地域の主任司祭の理解も得られていて、その主任司祭の協力を高く評価をしている。

「司祭の協力が大きいです。はっきりと説明が求められるが、神父様とどのように働いたらいいのか、はっきりダメなことはダメと言ってくれるし、これはダメなので、このようなやり方でやってなど色々教えてくれるし、サポートを良くしてくれています。」など B さんのような話が多かった。

信頼関係ができていないことではっきりと良い点、悪い点を具体的に挙げてくれており、コミュニケーションを円滑にする助けになっていると言える。

反対にペルー人の所属している教会への参加度について聞くと、「奇跡の主」の祭りのために積極的に活動するが、それ以外の教会の行事には忙しいため参加がないとリーダーたちの悩んでいる姿が見られた。

「洗礼、死者のためのミサ、クリスマスなど特別な行事しか来ないペルー人が多い。いくら誘っても行きますと言いながら、来ないこともよくあります」(A さん)

「どのような方法で呼ばばいいのか分からないです。もう少し参加するようにと求めると逆に怒ります。でも 9 月になると戻ってくるんです」と C さんは笑いながら語る。

ペルー人は教会にあまり来ないと訴えるリーダー 5 人は、日本での忙しい生活を要因として挙げるが、別の要因として、スペイン語を話す司祭の不足や、リーダー及び信者の養成ができていないこと、司牧・教区の方針などを訴える。この課題については、次

の第2世代の信仰継承において詳しく述べる。

4. 在留ペルー人第2世代の信仰継承と奇跡の主の将来の展望

調査対象者のリーダー5人に子どもへの信仰教育について質問を行った。キリスト教国であるペルーでは自然と身近にキリスト教に触れることができるが、日本社会では、特に中高生になると、週末のクラブ活動やアルバイト等忙しい生活の中で教会に通うことが減る不安を挙げている¹¹。

小学校6年生の娘のいるCさんは、信仰教育の難しさを次のように語る。

「娘とよく教会に行きます。初聖体の勉強もしているけれど、やはり年齢が上がっていくと難しくなります。学校では信仰のことで色々言われます。例えば、神は全てのところにいると言っても、周りの子どもに、どこにいるの、見えないけれど、からかわれることもある。また勉強で例えばダーウィンの理論とか、神様は六日間で世界を作ったと聖書にはあるけれど、恐竜はいつ消えたの、等よく質問してきますし、よく話し合っています。教会のメンバーも協力してくれ、彼女によく説明してくれます。他のお母さんも難しいと言います。宗教のことでいじめにあう子どももいると話しています。」

しかし5人に共通する言葉として「私は種を蒔いた」というマルコ、マタイやルカの福音書に記されているイエス様の「種を蒔く人」のたとえ（ルカによる福音書第8章4節から8節）から連想していると考えられる。それぞれ、子どもたちに幼い頃から信仰について話し、一緒に教会に通っていたことで「信仰の種を蒔いた」と強く語っている。

大学生2人の母であるDさんは自分の体験を次のように語る。

「私の娘は、彼女なりに信じていると思います。自分たちのやり方で、私のやり方ではないですが。日本の若者は様々な活動で忙しすぎてあまり教会に参加できません。彼女たちのために祈り、ロザリオや十字架などを渡し、大事に持っています。小さい時に彼女らを養成したつもりです。彼女らに信仰の種を蒔いたと信じています。神様の保護のもとにいることを信じてくれていると思います。」



（写真：「奇跡の主の聖行列」で子どもの祝福の様子：小牧教会奇跡の主信徒会より提供）

高校生の息子と社会人の娘がいる Aさんは幼い頃の信仰教育の重要性を次のように語る。

「私は幼い頃から子どもたちを教会に連れて行きました。日本の保育園では神様について話さないでしょう。15歳になってから話をしても、もう理解できないと思います。そのため、幼い頃から話すことはとても重要です。…家の近くにあるカトリック教会に通ったり、ミサで詩編を歌ったり関わっています。もちろんアルバイトやクラブ活動で忙しく、前に比べると参加は少なくなりましたが、彼らなりにスケジュールを組んで、教会に参加しています。種を蒔いたならば、彼らは信仰を忘れません。」

日本の高校に通っている娘がいる Bさんは子どもの信仰教育について次のように語る。

「高校生の娘は教会から少し離れています。子どもの時よく色んな聖行列に連れて行ってたし、説明もしたけれど、やはりペルーで私たちのように生きた経験はしていないから理解するのは難しいようです。…でも、子どもたちは私たちの姿をよく見ています。どのようなロールモデルであるか。私は種を蒔いたんです。後はその種が育つのを待ちます。」

奇跡の主の将来の展望を聞くと、若者の参加者が少ないところではその現実と向き合わなければならない辛さが語り口から感じられ、このまま第2世代の参加がなければ「奇跡の主のお祝い」の将来性はないと対象者全員が語っていた。

「私の仲間はまだ若いので、後20年くらい続くでしょう。そして第2世代の子ども、若者を養成すればきっと続いていくでしょう。」と Dさんは前向きに語っていた。しかし今後、司牧（司祭）・司教の積極的な働きを訴える調査対象者もいる。

Fさんは奇跡の主のお祝いの今後を尋ねると次のように語る。

「私が間違っているかも知れませんが、私が考えていることが起こらないことを願っていますが、次の世代は、（奇跡の主の祭りを）忘れると思います。関わっているペルー人はもう年をとっている。彼らの孫は信仰継承を同じ力で持てなくなり、お祝いを続けることは難しくなると思います。彼らはもうペルーには戻らないでしょう。悲しいですが大きな変化、例えば若いペルー人司祭の働きかけがない限り、おそらく日本での忙しい暮らしでは、奇跡の主への信仰は継承できないでしょう。」

また上記のコメントと同じく、Bさんも自分たちでは手に負えない状態を次のように語る。

「あまり考えたくないけれど、現実の一つであるから、そうならないように活動をしな
いといけません。でもこれ以上何ができるのか、私たち信徒だけでは、できることが
限られている。やはり、司教様にはもっと司牧に外国人と働くように指導してもらわ
なければならない。様々な伝統が失われてきているから手を打たなければなりません。」

また調査対象者にデカセギ現象が始まってからこの 30 年間でやり直せるのなら何を
するかと質問すると、「教会を外国人信徒にもっと開けて欲しい」、「多国籍からなる普
遍的な教会の現状を見て欲しい」、そして「リーダーの養成」を求める声が聞かれた。

Fさんはもっと早い段階で手を打っておけば外国人信者は教会から離れなかつたろ
うと次のように語る。

「最初の 90 年代では、日本の教会は冷たく、開放的ではなく、言葉もあまり理解でき
ずに、日本人信徒とは挨拶程度で、ミサに出てすぐ帰ることが多かった。しかし、外国
人司祭が外国人信徒に教会を開けようと日本人信徒に強く求め、少しずつ教会を私たち
の家みたいに感じるようになりました。教会を他の外国人の信者に開けることをもっと早
くにしていれば、きっと多くの信徒が離れなかつたと思います。失礼かもしれませんが、
今は司教様、神父様にはもっと教会の信徒と交流をして欲しいです。日本人の信者
の数も減り、高齢化になって来ています。1年に一回の訪問だけでなく、もっと深刻な
課題に立ち向かう姿を見せていただき、司教様の積極的な働きを望んでいます。」

教会がこの 30 年間で大きく変化してきたことは確かだが、外国人信徒の対応が未だ
に出来ていない教会の現状も見られる。Bさんはこの点について強く語っている。

「司牧関係者、司教様には現状を見て欲しいです。「日本の教会」ではなく、グローバ
ルな教会、普遍的な教会であることを理解して欲しいです。外国人信徒が今後も増える
と思います。例えばベトナム人がたくさん増えています。しかし、どのように接していけ
ばいいのか分からない日本人信徒が多いです。私たち 30 年前に直面した問題が今でも
あります。もっと教会の扉を広げてほしいです。」

またスペイン語のできる司祭による黙想会や勉強会、教会でまとめ役をする信徒のリ
ーダー養成、次の世代を引っ張るためのリーダーの育成の重要性を挙げる。

上記の話で、司祭の高齢化、または彼らの言語を話せる司祭がいな中、信徒の活躍
が益々重要となる。コミュニティをまとめる彼らの養成が教会の多文化共生に向けて、
また第 2 世代の信仰継承には不可欠となるのではないだろうか。また「教会の扉を開け
て欲しい」という調査対象者のコメントで故郷を離れ、時には孤立状態にある在留外国

人にとって同じ信仰を分かち合える仲間との交流の場としての教会の重要性が挙げられる。同じ国や同じマイノリティ状態にある仲間、そして時には日本人と唯一交流する場ともなる。彼らに居場所としてのカトリック教会を提供することは、同じ信仰を持った兄弟姉妹を温かく迎えるのと同時に教会の施設利用規則やルールを教え合いながら自由に使える環境を提供することに意味があるのではないかと考えられる。

V. 終わりに

このようにデカセギ現象が始まり 30 年が経過した現在では、日本中で「奇跡の主」を祝う地域が増加するようになった。地域によって形式が異なるが、教会の協力と理解を得て日本人信徒との関わりが増えたことが要因として挙げられる。しかし、ペルー人の若者の参加者が少なく、第 2 世代への信仰継承の課題が見られた。また、福音宣教するには養成がなければ難しいという現状を訴える者も多かった。

日本では年々司祭の数が減っている一方で、外国人信徒の数が増えている現状がどの地方の教会でも見られる¹²。これに立ち向かうために信徒の役割、特に両方の文化を理解し日本語もできる外国人信徒の育成、日本語ができなくてもリーダーの役割を果たせる信徒の適性を見分け、養成することが今からでも取り組める活動ではないかと考えられる。

筆者自身カトリック信者であり、教会の活動に関わりながら調査を進めている。普遍的な教会であるカトリック教会には今後も豊かな「恵み」として外国人を受け入れ、彼らの直面する問題に立ち向かい、共に歩んでくれる姿が今後も望まれる。

後注

1 出入国在留管理庁「令和 2 年 6 月末現在における在留外国人数について」

2 出入国在留管理庁「令和 2 年 6 月末現在における在留外国人数について」

3 三木英・沼尻正之（2012）「再現される故郷の祭り—滞日ペルー人の「奇跡の主」の祭をめぐって—」三木英・櫻井義秀編『日本に生きる移民たちの宗教生活』ミネルヴァ書房、pp.115-138。

4 寺澤宏美（2009）在日ペルー人の宗教行事「奇跡の主」異文化受容の視点から 浅香幸

枝編『地球時代の多文化共生の諸相 人が繋ぐ国際関係』行路社、PP.155-172。

5 古屋哲（2012） 「移住者の〈私たち〉の作り方——在日ペルー人が行うカトリック守護聖人の祝祭欧語文献をめぐって」『実践のコミュニティ ——移動、国家、運動』平井京之介・編著 京都大学出版会。

6 COSTILLA, JULIA, 2016, “UNA PRÁCTICA NEGRA QUE HA GANADO A LOS BLANCOS: SÍMBOLO, HISTORIA Y DEVOTOS EN EL CULTO AL SEÑOR DE LOS MILAGROS DE LIMA (SIGLOS XIX–XXI)”, ANTHROPOLOGICA DEL DEPARTAMENTO DE CIENCIAS SOCIALES 34: 149–176.

7 同上、P.163。

8 三木英・沼尻正之（2012）「再現される故郷の祭り—滞日ペルー人の「奇跡の主」の祭をめぐって—」三木英・櫻井義秀編『日本に生きる移民たちの宗教生活』ミネルヴァ書房、P.118。

9 ペルー共和国を代表する伝統舞踊である。ペルーの無形文化遺産ともなっている。

10 「男性は紫の丈の長い上着とケープを着用し、縄状に結ばれた白色の太い紐を首に付ける。女性は紫のワンピース姿である。」（三木・沼尻、2012、P.118）

11 2007年のペルー国勢調査ではカトリック人口の割合は約80%、プロテスタント人口の割合は約12%とされている。（文化庁文化部宗務課「在留外国人の宗教事情に関する資料集」—東アジア・南アメリカ編—平成26年3月）

12 オチャンテ 村井 ロサ メルセデス（2019） 「教皇フランシスコを出迎える新しい日本のカトリック教会—多様化する信者の現状と課題を中心に—」紀要エレノア第2号 P.64。

参考文献

・ M. ESTHER FERNANDEZ-MOSTAZA, WILSON MUÑOZ HENRIQUEZ, 2018, “A CRISTO MORENO IN BARCELONA: THE STAGING OF IDENTITY-BASED UNITY AND DIFFERENCE IN THE PROCESSION OF THE LORD OF MIRACLES”, RELIGIONS 9, 121; DOI:10.3390/REL9040121

・ VERÓNICA ROLDÁN, 2018, “DOCUMENTAL: RELIGIÓN E INMIGRACIÓN: EL SEÑOR DE LOS MILAGROS EN ROMA”, ENCARTES ANTROPOLÓGICOS VOL. 1, NÚM. 1, PP. 140-151